

古代においても瀬戸内航路は西日本を結ぶ大動脈でしたが、とりわけ交通の頻繁な播

州へ赴任する官人が暴風の高砂湊に宿ったことは以前に紹介した通りです。

磨から摂津にかけては五泊が設けられました。五泊とは

『播磨国風土記』によると、仲哀天皇が神功皇后とともに筑紫平定に向かい、御舟が

櫻生泊（御津町室津）・韓泊（姫

印南浦に停泊したさいに、海

路市的形）・魚住泊（明石市魚

原が凪ぎ波風が静かだったた

住付近）・大輪田泊（神戸市・

め、入浪の郡と名づけたのが、

河尻（尼崎市今福付近）の五

印南郡の名前の起こりだとさ

つの津泊をさし、各泊の間が平均約二一〇二二キロ、い

れています。『万葉集』巻七、一一七八番歌に「印南野は

れも一日行程で結ばれていました。三善清行の「意見封事

行き過ぎぬらし 天伝ふ 日笠の浦に 波立てり見ゆ」と

十二箇条」には、奈良時代の僧行基が建置したとあるので、

あるように、古代には海水が日笠山の東方まで深く入りこ

広く官民の利用に供せられたのでしよう。

んでいました。

五泊の周辺にも大きな港湾はいくつもありました。魚

知られていたとすると、高砂浦や日笠浦は暴風雨のさいの

住泊の東には明石湖（『万葉集』巻七、一〇二九番歌）、同

浦や日笠浦は暴風雨のさいの避難港としても利用価値が高

じく西には可古湊（同巻三、

かったのかもしれない。

二五三番歌。『日本書紀』では

（高砂市史編さん専門委員

鹿子水門）があり、韓泊の東には高砂湊がありました。九